

# 金尾文淵堂をめぐる人々（その二）

——著者と出版者

石 塚 純 一

はじめに

社史はおろか、一篇の図書目録さえ残さずに消えていった出版社は膨大な数に上る。というよりも出版社のほとんどがそうなのである。後世に残るものは限られた古書だが、そのときに本は著者のものになり、出版社の名は忘れ去られる。本の文化が崩れかけている現代、紙の本が出版者によって生み出される過程を、著者と出版社（編集者）、出版者と造本関係者、出版者と読者（読者は未来の著者でもある）の関係の中に探ろうと思う。本をめぐる文化とはどのような姿をもち、どのように形成されてきたのか、作り手たちのネットワークの中に検討し直してみたい。今や失われた出版社が重要なのである。

明治後期から大正期にかけて活発な出版活動を展開し、出版者金尾種次郎の生涯と共に消えて行った金尾文淵堂に焦点を当てて、文淵堂が著者とどのような関係結びながらどのような本を刊行していったのか、出版者と著者の関係像を描いてみたい。大阪から出発した出版社の明治三五年―一九〇二年の風景はいまから百年前のことである。

### 一、金尾文淵堂という書肆

#### 明治四〇年の出版広告から

出版社の歴史は刊行物の歴史である。金尾文淵堂はいかなる本を出版したのか。まず手がかりとして明治四〇年（一九〇七）に刊行された横瀬夜雨著『二十八宿』の巻末自社広告に掲げられた文淵堂の出版物を見よう（10・11頁参照）。明治四〇年という年は文淵堂にとって転換期のひとつで、ここには前半期の主要な本が掲げられている。

この刊行書目を見ながら、すでに判明している金尾文淵堂の概略を整理すると、

- 一、自社広告に見られるように文学、宗教、美術、旅行案内をおもな出版内容とする出版社であった。
- 一、金尾種次郎（明治一二年・一八七九生―昭和二二年・一九四七没）は、大阪市東区南本町四丁目三六番地で生れた。父は敦賀屋為七、江戸期からつづく仏教書の版元兼書店を営んでいた。妹夏子が明治二〇年に生れた（昭和二〇年没）。夏子は結婚するまで種次郎とともに活動する。明治二七年に父が死去、一六歳で家督を相続する。俳句など文学好きの種次郎は自らの趣向にしたがって明治三〇年代に新たな出版活動を開始した。

彼は出版の素人ではなかったが、財産のすべてを自分の出版活動につき込んだ。

一、金尾文淵堂の本は凝った造本、丁寧で美しい本として後世に知られる。売って稼ぐより造本にかかる支出のほうが大きく、出版社経営はつねに苦しく、倒産も経験したが、その後も出版活動が続けた。

一、金尾文淵堂は文芸出版から出発したが、同じころ同様の出版傾向をもった出版社に佐藤義亮の新潮社（佐藤は雑誌『新声』を創刊ののち、明治三十七年に新潮社創業）や和田篤太郎の春陽堂（明治十一年に書店を、二〇年に出版を開始、雑誌「新小説」などがある）。

一、金尾種次郎は明治三十七ころ東京へ出て、大正一二年の大震災まで東京で出版活動を続け、震災後に大阪へ戻り、その後は大阪を中心に活動、第二次大戦後の昭和二二年に病没し、文淵堂の出版も終わった。

## 金尾文淵堂についての研究

本の為に産を興し、貴族院に納った成金党も少なくはないが、一方には本の為に倒産破産の惨境に陥った者も相当に在る。後者の代表的な者は倚人伝中の随一にも掲ぐべき人に金尾文淵堂があった。明治大正を通じて、真に費用のかけられた本らしい本を出版したのは文淵堂を第一位に押すべきである。この金尾は未だ大阪辺に存命と思うが、出版良心に富むというより、本は良いものにせねばならぬという一種の信仰者であった。

と述べるのは斎藤昌三<sup>\*1</sup>である。

「文淵堂図書要覧」(横瀬夜雨『二十八宿』へ明治四〇年)の巻末広告より

\*宗教書類

綱島梁川「病間録」

同「回光録」

金尾文淵堂編「病間録批評集」

綱島・宇佐美編「見神論評」

中村春雨「旧約物語」

同「新約物語」

春雨解説「基督物語」

清沢満之「懺悔録」

海老名弾正「靈海新潮」

浩々洞同人「沈思録」

\*化学及雑書

五十嵐力「児童之研究」

朝倉無声「日本小説年表」

木下尚江「懺悔」

安部磯雄「理想の人」

山路愛山「社会主義管見」

浩々歌客「鷗心録」

\*小説類

木下尚江「靈か肉か」

同「火の柱」

同「良人の自白」

二葉亭訳「うき草」

中村春雨「無花果」

同「密航婦」

菊池幽芳「妙な男」

柳川春葉「縁の糸」

須藤南翠「間一髪」

大倉桃郎「琵琶歌」

同「旧山河」

佐野天声「露の曲」

\*脚本演劇書類

草野柴二訳「モリエール全集」

巖谷小波「喜劇七草」

佐野天声「不死の誓」

**\*詩集書類**

薄田泣堇「白羊宮」

同「白玉姫」

同「行く春」

同「暮笛集」

鉄幹・晶子合著「毒草」

河井醉茗「塔影」

高安月郊「寢覚草」

横瀬夜雨「二十八宿」

一色白浪「頌栄」

岩野泡鳴「泡鳴詩集」

**\*歌集書類**

与謝野晶子「夢の華」

同「乱れ髪」

同「小扇」

晶子・外二女史「恋衣」

与謝野鉄幹「むらさき」

晶子選「黒髪」

**\*筆跡及画集**

子規自筆「俳人芭蕉」

蕪村真蹟「俳諧三十六歌仙」

中沢弘光「富士十二景」

「三十九年度白馬会紀念画集」

小杉万吾「風景水彩画帖」

**\*月刊書類**

島村抱月主幹「早稻田文学」

三宅雪嶺主幹「日本及日本人」

このように出版の歴史において金尾文淵堂が重要だとする後世の発言は斎藤をはじめとして数多く、また薄田泣菫・与謝野晶子・徳富蘆花・広津和郎ら文淵堂とかかわりのあった同時代の作家や、小川菊松ら出版同業者の思い出話も断片的ではあるが多数残されている。

金尾自身が書き残した記録はたいへん少なく、文淵堂の内実と全体像を捉えることはなかなか困難だが、いくつかの研究が試みられている。第一は足立巻一「文淵堂・金尾種次郎覚書——大阪時代<sup>\*2</sup>」であり、金尾夫人に直接話を聞くなど、書肆金尾文淵堂のルーツを明らかにしたことが特に評価されよう。次に田熊渭津子「金尾種次郎年譜考<sup>\*3</sup>」がある。この論文は足立の研究を補うように資料（主として蘆花関連）を集めて文淵堂の東京時代を明らかにしたものとして注目に価する。また高橋輝次「金尾文淵堂 その人と仕事」上・下も前二者の研究を受けてさらに新たな事実を加えて金尾種次郎の編集者としての仕事ぶりに迫ろうとしている。これらによって金尾文淵堂の歴史的輪郭はかなりはつきりと捉えることができる。

さらに金尾が大阪で明治三二年に発刊した文芸雑誌『ふた葉』（三二年一月～三三年六月、一四冊と臨時増刊号一冊）と、三三年に『ふた葉』を改題し発展させた雑誌『小天地』（三三年一〇月～三六年一月、二五冊刊行）についての書誌的な研究、藤田福夫「文学雑誌『ふた葉』総目録とその内容概観<sup>\*5</sup>」、同「文学雑誌『小天地』総目録と金尾文淵堂<sup>\*6</sup>」によって金尾種次郎の出版者としての出発点となった雑誌が明らかにされている。

雑誌『小天地』はいままでほとんど注目されず、坪内祐三は、『近代文学雑誌事典』（至文堂）の「小天地」の項目は、石川啄木が出し一号雑誌で終わった同名の『小天地』しか記述せず、しかもその図版として金尾文淵堂の『小天地』の表紙写真が掲載されている誤りを指摘している<sup>\*7</sup>。

### 三度の危機がターニングポイント

先行研究を踏まえて、文淵堂の歴史を探っていくと、重要な三つのターニングポイントがあったように思える。文淵堂の道のりをこの転換期をはさむ四つの時期に分けて考えることができるのではないか。

そのポイントとはいずれも経営危機に見舞われた時期である。常に金策に苦勞していた金尾だが、なかでも特に行き詰まったと思われる時期がある。現在作成中の文淵堂の出版図書リストによると、その時期に出版活動が明らかに収縮していることがわかる。<sup>\*</sup>しかし危機の後金尾は出版を諦めることなく常に細々と再開し、いくつかの成功作を生み出すと、それをテコに活動をつづけるのである。

第一のピンチは、雑誌『小天地』が終刊する明治三六年である。

明治二七年、一六歳の金尾種次郎が父の死後家督を受け継ぎ独自に出版業をはじめてから、雑誌『ふた葉』を創刊し（三二年）、薄田泣菫の処女詩集『暮笛集』を出版し、翌年から『小天地』を発行し続けるが、三六年、児玉花外『社会主義詩集』の発禁などが重なり、ついに経済的に行き詰まり『小天地』を終刊するまでの大阪時代である。

第二の危機は、明治四〇年（一九〇七）末ころである。

大阪で行き詰まった金尾が三七年末に東京へ出て、大倉桃郎の懸賞当選小説『琵琶歌』の版權を元に同書を刊行して成功する三八年から第二期ははじまる。その後綱島梁川・与謝野晶子・木下尚江・岩野泡鳴・薄田泣菫・清沢満之・柳川春葉・菊池幽芳らの本を次々と刊行し、文淵堂の特徴を示すラインナップを形成する約四年間である。年間の出版点数が二〇点を越える年もある（現時点での調査結果だが、明治三七―三八年は合わせて一七

点、三九年は二七点、四〇年は二二点。しかし、四〇年秋に急速に経営状態が悪化、その要因の一つは、望月信亨編『仏教大辞典』の費用増大と刊行の大幅な遅れによるものだった。四一年に経営はついに破綻する。

第三の危機は、大正一〇年の徳富蘆花・愛子『日本から日本へ』の刊行の後である。

ここまでの期間、第三期は約一八年と長い。明治四〇年の危機の後、四一年と四二年の出版点数はわずかに四、五点ずつに終わり、四二年には東京書籍商組合を脱退するなど苦境の時期である。しかし、この時期にツルゲーネフ／二葉亭四迷訳の『うき草』や内田魯庵の著書や翻訳本（『二人画工』シェンキーウィツ著）を刊行する。そして四三年には空海・親鸞などの伝記をシリーズ化した須藤光輝編『教祖伝記叢書』など宗教書の刊行を手始めに徐々に刊行点数を増していく。この時期は宗教書と旅行の本が増える点に特徴があるが、文学書では田村俊子の注目作『あきらめ』（明治四四）、のちに『与謝野源氏』として定評を得る晶子の『新訳源氏ものがたり』四巻（明治四五）、新聞連載で話題となったベストセラー家庭小説、柳川春葉の『生さぬなか』（大正二）、北原白秋『印度更紗』同『白金之独楽』（大正三）など注目すべき本がある。旅行案内には『畿内見物』大和の巻・京都の巻（明治四四）・大阪の巻（明治四五）や児玉花外『東京印象記』（明治四四）、エフ・スタール『御札行脚』（大正八）、『近畿地方パノラマ地図』（大正一一）など精緻な地図や挿絵を織り込んだ本、また『阪神名勝図会』（赤松麟作他画、大正五）、『非水図案集』（杉浦非水画、大正四）、水島爾保布『東海道五十三次』（大正九）、『関東大震災画帖』（大正一二）などの美術書も注目すべきものだ。一年間に五点から十数点を刊行しつづけた。

この時期の終わりを画する書物が、徳富蘆花・愛子夫妻の欧州旅行記、『日本から日本へ』東西二巻である。大正一〇年に刊行されたが、これ以降年間発行点数が急激に減る。文学書はほとんど消えてしまう。『日本から日本



へ』は金尾種次郎が徳富蘆花に懇願して本にした、長いつきあいの末のたった一つの成果だったが、商売としても造本としても失敗した。蘆花と金尾の関係は著者と出版者の一つのかたちを良く表している。大正一二年の関東大震災で金尾は東京を去り、大阪市西成区千本通りに移る。蘆花との関係については後述する。

金尾種次郎の晩年にあたる第四期のうち、昭和四年から昭和一二年までに刊行された書目は管見の限りわずかに二点である。伊達俊光の『大大阪と文化』（金尾文淵堂、昭和一七）には、昭和一〇年に自前の出版ではなく大阪の医師が出資した婦人雑誌「常磐木」の編集発売を引き受けたと記されているが、昭和初期の八年間は出版から遠ざかり、何をしていたのかはつきりしない時期である。大阪明治文化研究会などに時々出席し、回想談話を発表したことが『大大阪と文化』などにより判るのだが。

そして昭和一三年に入ると与謝野晶子の『新新訳源氏物語』全六巻を刊行し、太平洋戦争開始から敗戦の翌々年までに一七点の本（仏教書が多い）を刊行する。金尾種次郎は大阪空襲を避けて京都西ノ京町に移り、戦後も七点ほどの出版を行ったが昭和二二年の一月、狭心症をおこして永眠した。

## 二、金尾文淵堂の著者人脈

先に見た明治四〇年ころの刊行物一覧（広告）や、作成中の刊行図書年譜に表われる著者たちの名を文淵堂の歴史的転期に配してみると、文淵堂と特に関係の深かったいくつかの著者群が浮かび上がってくる。

その一つは平尾不孤を中心とするグループであり、第二は幼なじみの俳句仲間、また角田浩々歌客などの新聞社

系の人物群、社会主義者やキリスト者などの社会派、装丁や挿画を担当した画家たちのグループ、新仏教運動に関わりをもった仏教学者たちなどである。もちろんこれらに入りきらない重要な人々もいて金尾文淵堂の出版の広さを物語るが、あえてグループ・ピングを試みることによって出版者の性格や著者群の重なりや関係性を明らかにすることが出来るのではないかと思う。

本稿では、文淵堂の大阪時代（第一期）を中心に第二期にも連なる三つのグループについて見ていきたい。

(1) 不孤・泣堇・花外・梁川

まず、金尾種次郎が家業の仏教書出版を離れて、文学関係の出版に手を染めた最初は、明治三三年（一八九九）、文芸雑誌『ふた葉』の刊行と、薄田泣堇の詩集『暮笛集』の刊行だった。金尾の四八年間に及ぶ出版活動の原点に『ふた葉』とそれに続く『小天地』があり、薄田泣堇との出会いとその周囲から展開していく人間関係が金尾文淵堂の著者人脈の核を形成していったといっても過言ではない。

明治三〇年ころの大阪文壇の状況については、明石利代「明治期大阪での文学雑誌の書誌的展望」<sup>\*9</sup>や前記の藤田福夫の総目録研究、河井醉茗の『醉茗随筆』<sup>\*10</sup>、小林政治の回想記「浪華青年文学会について」<sup>\*11</sup>などが、東京に比べて遅れていた文学活動がようやく活発化してくる様子を描いている。金尾文淵堂の存在と雑誌の創刊は一石を投じるものであった。

## 平尾不孤と薄田泣堇

平尾不孤（一八七四―一九〇五）は金尾文淵堂の初期の人脈を考える上で決定的に重要な人物である。不孤は明治七年、備中新見の生れ、本名徳五郎。岡山中学で薄田泣堇と出会い生涯の友となる。泣堇より一級上で校友会誌「尚志会雑誌」で活躍していた。のち早稲田の東京専門学校に学び、東京で評論活動を行っていたが、明治三年の五月、『造士新聞』<sup>\*12</sup>の編集者に迎えられて大阪に来る。明治三年といえはこの一月に金尾文淵堂は『ふた葉』を創刊し、九月発行の同誌第二卷三号に平尾不孤は「英文学史の研究を促す」と題して評論を寄せているので、文芸を志す青年同士として、また同じ編集者として金尾種次郎との交流がこの年には始まっていたことがわかる。

そして不孤は金尾に友人の若き詩人薄田泣堇を紹介した。泣堇の回想によると「三二年の夏頃、大阪の書肆文淵堂の主人で、俳名を春草といふ金尾種次郎氏が、その頃大阪で『造士新聞』といふ文芸新聞を編輯発行してゐた私の友人平尾不孤氏を通じて、私の詩集を発行させてくれといつて来ました」と記している。<sup>\*13</sup>

## 泣堇と『暮笛集』

泣堇薄田淳介（一八七七―一九四五）は、岡山県浅口郡、現在の倉敷市連島町に生れた。岡山中学を二年で退学（軍人上がりの体操教師と合わず）、京都から東京へ出て漢学塾に寄寓し独学でワーズワースやバイロンの英詩や漢詩文を学ぶ。新体詩を書き、金尾文淵堂から明治三年に『暮笛集』、三九年に『白羊宮』を刊行。大正元年から大阪毎日新聞記者となり、作詩から遠ざかるが大正五年から新聞連載したコラム「茶話」は話題になる。パーキンソン氏病による手足の不自由が徐々に進行し、大正一二年に退社。晩年は随筆家として過ごした。

松村緑『薄田泣菫考』<sup>\*14</sup>などによれば、泣菫はすでに明治三〇年五月、雑誌『新著月刊』（後藤宙外が島村抱月らと三〇年四月に創刊）に「花密蔵難見（はなのみつにしてかくれてみえがたし）」と題する詩を載せて文壇にデビューし、おおむね好評をえた。後藤宙外は泣菫を見出し、『新著月刊』から『新小説』（春陽堂）の編集者に移ったのも『新小説』に泣菫の詩を載せ、この新人の作を帝大系の大町桂月の寄稿よりも上位に置き、『帝国文学』関係者を刺激したところ、『帝国文学』第五卷九の雑報欄で匿名筆者が、後藤宙外を論難し、作者を誹謗して次のように書いた。

二子（今一人は幸田露伴門下の新進作家田村松魚——引用者注）何等の修養かある何等の蓄積かある。高等の学未だ修めざる所なり否普通の課程をすら全く終へたりと言ふべからず、外国文学の趣味又彼等の十分に解し得る所にあらず、……彼等が詩人と称し作家と称するの資格將た何処にかある。所詮修養の時代なり、蓄積の時代なり。<sup>\*15</sup>

これを読んで怒ったのは大阪にいた親友の平尾不孤だった。早速自分の編集する『造士新聞』第三四号に「帝国文学記者に与ふるの書」を掲げた。後藤宙外は『新小説』に不孤の全文を引用掲載して、自らも学閥で文学を評する「記者」に対して批判の論陣を張った。平尾不孤の「帝国文学記者に与ふるの書」は、薄田泣菫が東京でいかなる困難と苦心をもって独学的修養を積んだか、一日も欠かさず図書館に通い、英書を読んで西洋文学を、その一方で国文学や漢詩文を研究するなど図書館が彼の唯一の学校だったことを説き、研鑽の結果として病をえて郷里に戻

り、「死と戦ひつゝ、今尚孜々として修養を怠らず、静かに田園に苦学しつゝ、ある彼」、「自然の天地に新しき生命を得んとして帰省せし田園も、終に彼を容るゝの地にあらざるを啣ちて、幾度か短刀の柄を把らんとする今日の」泣堇の苦悩と精神性の高さを知らうとしないでものをいう『帝国文学』記者の態度に激烈な抗議をおこなった。<sup>\*16</sup>この文の中で平尾不孤は泣堇の詩集を金尾文淵堂で出版すると発表した。「われ等は彼の不遇を黙視するに憊びず、今秋文淵堂金尾思西君と、彼が為に一卷の詩集を出版せんことを図る。談既に熟して其刊行近きにあらんとす、『暮笛集』は即ち是れ」と。

不孤にこの話を持ち込まれた金尾種次郎はその熱情と泣堇の作品に動かされたのだろう。二〇歳になったばかりの金尾は損を覚悟で引き受けた。これが文淵堂で発行した最初の文学書である。不孤は、出版の過程で薄田泣堇が金尾種次郎に与えたという書簡を示している。

わが詩まことにいふに足るべきものなし、されどわが詩のわが調を保つて、この胸より出で候はんほどは、永く君の厚意を忘れまじく候。われは書肆としての君にわが詩を托せず、今日よりわが為めに尽さるゝ懇切の詞友としての君に托す。君は平尾君を介して原稿料のことをいへど、原稿料を払うべくば、君の懇情の消えざらん限りは唯三銭にても足り候、わが詩世に読まれず、書肆としての君に迷惑を及ぼすこともあらば、われは何物をも要せざるべく候、君が厚意につけ入りて、われを満さんなどの卑しき心はつゆこの胸にやどらず候……<sup>\*17</sup>

ここに表されているのは単なる出版の礼ではない。定職が無く故郷に帰って肩身の狭い思いをしていた泣堇が原

稿料を必要としなかったわけはなく、売れるはずの無い無名詩人の詩集を出そうという出版者を友と呼ぶ熱い気持ちが見られている。それに応えるかのように金尾はすばらしい造本に仕上げる。『暮笛集』は四六横判、絹糸綴じ、本文は赤い罫線囲みの内に詩を印刷する二度刷り、表紙はカンバスに一管の笛を配した水辺の風景を描く。挿図は赤松麟作と丹羽黙仙の筆で各五葉ずつ、口絵は赤松の「兄と妹」だった（第三版は、表紙絵が笛吹き童子のアールヌーボー的な図案、挿絵は無く赤松の口絵二葉）。明治三二年以前にこれほど美しい詩の本はなかったといわれている。

このようにして平尾不孤は薄田泣菫と金尾種次郎を結び合わせ、以後金尾文淵堂から泣菫の『ゆく春』『白羊宮』『白玉姫』など詩集や詩文集の主要なものはすべて刊行される。さらに泣菫は金尾に懇請されて三三年に創刊する雑誌『小天地』の編集責任者に就き、平尾不孤、角田浩々歌客とともに編集にあたる。三三年一二月に泣菫は一旦大阪毎日新聞に就職し、『小天地』の編集長を兼任するが、翌年二月には『大毎』（大阪毎日新聞を『大毎』と略す）を辞して『小天地』の編集に専念する。泣菫は「明治三四年二月ヨリ同三六年三月マデ文芸雑誌小天地ノ編集ヲ主宰ス月俸四五円」と記すので、<sup>\*18</sup>金尾が当時としては高給で泣菫を雇ったことがわかる。泣菫は金尾文淵堂の二階に住みついてその任にあたった。三三年九月には平尾不孤も『造士新聞』の廃刊で大阪毎日に入社している。

#### 平尾不孤の悲劇

平尾不孤は、大阪の文壇人の狭量さや実質の無さを批判しながら、<sup>\*19</sup>『小天地』に文芸・社会評論や小説を寄稿し続け、泣菫も編集のかたわら作品を発表する。しかし、不孤は明治三四年夏、東京在住の女子学生（もと大阪の造士

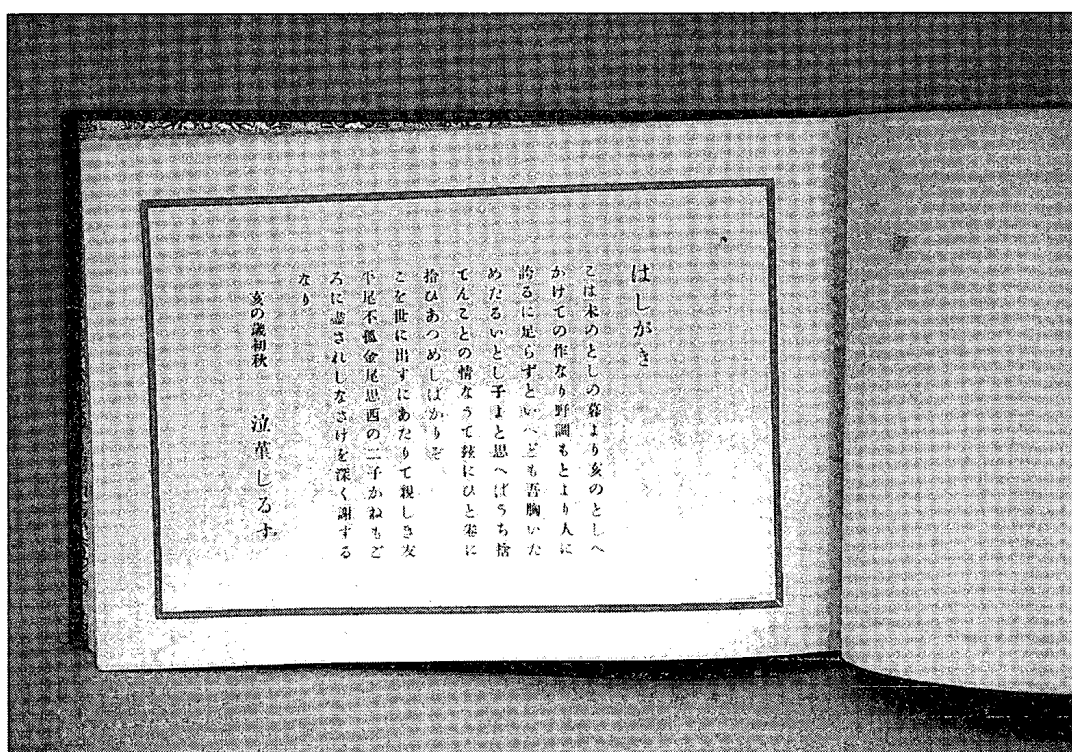
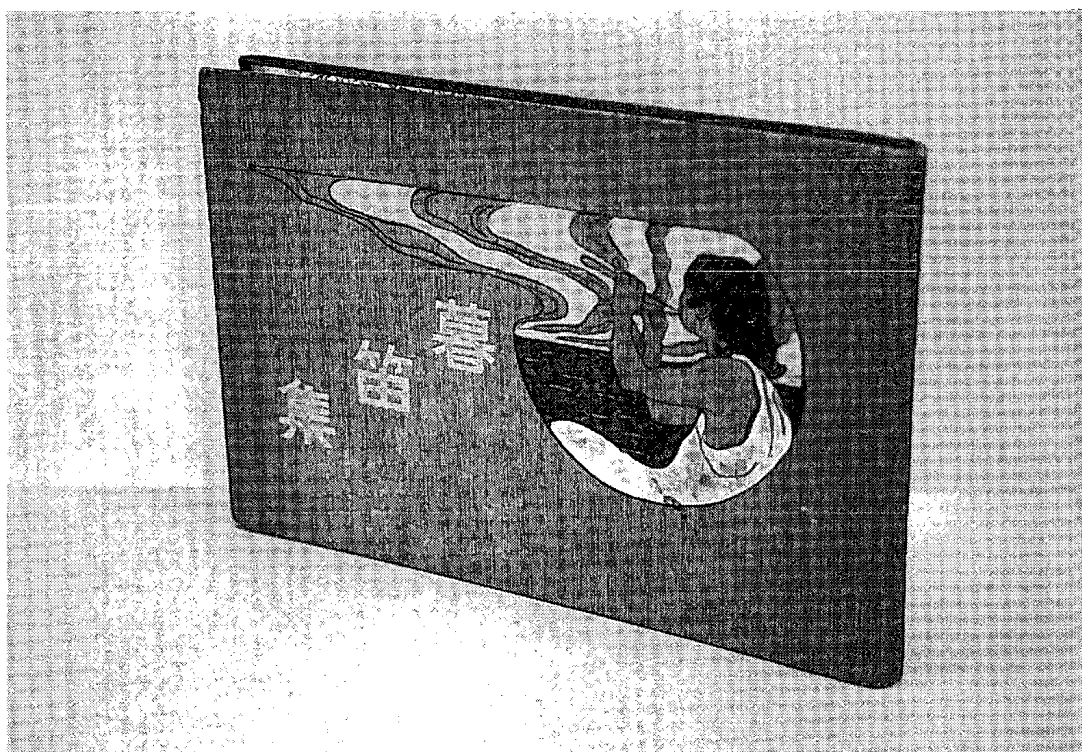


図1 薄田泣莖の第一詩集『暮笛集』（第三版）の表紙と「はしがき」（囲みケイは赤版の二色刷）

寮にいて不孤と知り合う。実は朝鮮にいる叔父との間に子どもがあったとの恋愛関係を『萬朝報』に書き立てられ世間の非難の的となった。不孤は友人たちの意見も聞かずに彼女を救うと言って、毎日新聞を辞し無謀な上京を敢行した。東京では恩師坪内逍遙の庇護によって金港堂の雑誌『文芸界』の編集者の職につき、相手の女性と結婚した。その女性の主我的で打算的な性格を知っていた薄田泣菫は内心憂慮したが、一本気で誤解を受けやすい不孤のために敢然と弁護人の役割を果たした。<sup>\*21</sup>

不孤は結核を病んでいた。病状の悪化にともなって編集の職を辞し、もっぱら執筆をおこない、『読売新聞』の懸賞脚本に応募した「志士 関武彦」が選ばれて二百円の賞金を手にするが、妻はその金を半分もって逃げ、行方をくらましてしまう。こうした悲劇を抱えながら不孤は小田原、葉山と転々としたのち京都に移り、神楽岡のふもとに下宿し同志社神学校に入って海老名弾正により洗礼を受けた。このときに後述する児玉花外と「ほのほ」会を結成した。しかし、病いは容赦なく進行し、病院には一人の親類の見舞いもなく、明治三八年五月に三三歳の若さで世を去る。児玉花外は不孤の追悼文にこう記す。

自分が不孤君と知つたのは丁度六年前、吉川曾水、生田葵山の諸氏と土曜会といふ文学研究会を創めた時であるが、真に肝胆相照らしたのは、昨年の夏君が京都へ来られた折からである。ああ。緑なす神楽岡の麓、此処なる下宿楼上は君の為に記念すべき家である。吾と「ほのほ」会の感情の火を興したのも此の階上の室だ、世の荊棘と腐敗を焼くべく炎を吐かんとして、悲憤反って血を啗いたのもここだ。<sup>\*22</sup>



『大阪朝日新聞』の死亡記事は次のように記す。「(前略) 昨年以來京都同志社神学校に入りて、偏に宗教研究に従ひ、ほのほ会を組織して文学講演をなせしが如きは、その志を見るべし、著すところの小説「児手柏」(造士新聞)「小麦畑」(小天地)「脚本関武彦」(読売新聞)等最も著る、文人の薄幸必ずしも少なからず、但だ君の如き前途有望の士竟に病にたふる、惨にして悲し」。

この恋愛事件と不孤の悲劇的な晩年については、薄田泣菫の随筆「恋妻であり敵であつた」<sup>\*23</sup>にある程度明らかである。また、『新小説』明治三十八年七月号の平尾不孤追悼文集には児玉のほかに、高須梅溪(芳次郎)、中村春雨、斎藤弔花、平野柏蔭が書き、次号では綱島梁川が弔文をよせている。<sup>\*24</sup>

金尾文淵堂が近代出版をはじめのスタート時点において、平尾不孤は欠かすことのできない人物であつた。金尾種次郎を動かし、大阪という一都市の趣味的な文芸出版社から普遍的地平を望む出版社へと脱皮させる挑発者となつた。激しく一徹で頑固な若き批評家の早世は文淵堂にとつても惜しむべき出来事だったが、不孤は文淵堂が薄田泣菫や後藤宙外、児玉花外、高安月郊、綱島梁川、鈴木鼓村、角田浩々歌客ら特色ある執筆人脈を形成していくそのかなめに位置する存在であつた。

#### 児玉花外と『社会主義詩集』

平尾不孤が金尾と結びつけた詩人がもう一人いる。児玉花外(一八七四―一九四三)である。今では明治大学校歌「白雲なびく駿河台」の作詞家としてわずかに知られるだけかもしれない。児玉花外は明治七年京都に生まれた。本名伝八、父は医業を営む。同志社予科中退、仙台の東華学校に入学するが二五年に廃校となり、札幌農学校予科に

転学、新渡戸稲造の講義を受けるが中退、その後早稲田の東京専門学校文科に入学、坪内逍遙のもとで詩作をはじめ。ここで多くの友人を持つが三〇年に中途退学し、京都に帰る。明治三十一年から内村鑑三の『東京独立雑誌』を主な詩の発表の場とした。

先の平尾不孤の追悼文にあったように、不孤とは明治三二年、文学研究の土曜会ではじめて知り合う。花外がはじめて金尾文淵堂の『ふた葉』に登場するのは、翌三三年三月の号の「泉の辺にて」で、同年六月の第三卷三号にも「牧童」の詩を寄せている。『小天地』には三四年「雪に放ちし鼠」をはじめとして三六年の終刊まで何度か登場している。明治三五年四月から二年間、大阪に居住し「評論之評論」記者として働いていたので、不孤を通じて金尾種次郎や薄田泣菫が花外と頻繁に交流したのは三三年と三十五、六年ころだろう。

そして明治三六年八月に児玉花外は『社会主義詩集』を金尾文淵堂から刊行するが、本書は発売後ただちに発禁となりすべてを没収された。詩集の発禁はこの時代これがはじめてである。発行元は東京の社会主義図書館（雑誌『社会主義』の発行所）と大阪の金尾文淵堂との共同だったが、実質的に編集を担当したのは金尾種次郎だったと野口存弥は述べる。<sup>\*25</sup>

本書が刊行され発禁になった翌年、『花外詩集』（児玉花外が発行、金尾文淵堂発売）を刊行する。この詩集には巻末に「同情録」という文集が付されている。詩集が発禁となったことに対するコメント集であり、そのまえがきに花外は次のような文を書いている。

わが『社会主義詩集』の奇禍を買ふや、諸方より慰問奨励の詞を給ひ、多大なる同情を寄せられたるを以て

小生感激措く能はず、即ち厄災を蒙りたる書肆文淵堂主人に贈るの拙詩篇と、夫れに併せ与ふる趣旨にて諸先輩及び詞友に同情所見を求めんが為め書簡を呈せしに、諸方より義気同情の聚まるところ、比の一卷を作せり。

つまり、詩集が発禁処分となり多くの人々から同情が寄せられて花外は感激した。この件で打撃をうけた金尾種次郎に贈る詩を書き、金尾への慰問や励ましの言葉をもらえないかという依頼の手紙を出したところ、あちこちから同情の言葉が集まってきたのでこの「花外詩集」を作ったというわけである。

「同情録」には平尾不孤や薄田泣菫の名も見えるが、このころ不孤は病床にあつて、次のような短文を寄せた。

病不孤生「詩は思想の花也。花開いて風雨多しといへど、そは嫉み多きうつつ世のことと思ひしに、何ぞ料らん、詩園亦この嫉風妬雨あらんとは。傷心に堪へず、一書を寄せて私憤を漏らさんとすれど、<sup>(マ)</sup>堅われをして筆を執る能はざらしむ。すなわち短文を草して吾兄の災厄を見舞ふといふ。(湘南客舎にて褥中仰臥書)」

不孤はこの翌年に死ぬが、花外は先の弔文の他にも平尾不孤を偲ぶ文「綱島梁川君を弔して不孤子を憶ふ」を綴っている。<sup>\*26</sup>花外と不孤は友人であるに止まらず、現実社会や文壇への批判という共通認識があった。不孤と花外を結ぶ延長線上に横瀬夜雨や木下尚江を位置づけることもできるだろう。金尾文淵堂はかれらの間にあつて友情や精神の表出を本のかたちにするという重要な役割をはたしている。この同情録には五九名の文が収められ、幸徳秋水の詩なども寄せられているが、金尾文淵堂とかかわりの深い人物が顔を揃えていることに注意したい。五九名の内、

文淵堂で執筆している人物は次の通りである。岩野泡鳴、河井醉茗、堺枯川、木下尚江、角田浩々歌客、山本露葉、前田林外、松崎天民、三木天遊、高安月郊、高須梅溪、後藤宙外、平尾不孤、綱島梁川、安部磯雄、平木白星、小栗風葉、薄田泣菫、中村春雨、鈴木鼓村、大町桂月（『社会主義詩集』岡野他家夫編（日本評論社 昭和二四年）より）<sup>\*27</sup>

児玉花外の詩人としての展開について野口存弥は次のように述べる。「薄田泣菫または平尾不孤を通じて後藤宙外の知遇を得たのか、花外は明治三五年（一九〇二）六月から『新小説』へも寄稿を開始する。社会主義詩人と呼ばれる存在になるだけでなく明治詩壇にたつ人となる回路があつて、それはひとえに『ふた葉』↓『小天地』↓『新小説』へと向かう道筋にかかつていた」<sup>\*28</sup>。

児玉花外はその後金尾文淵堂との交渉があり、明治四四年に『東京印象記』を出版した。この本は序文に「西の国のデカダンの詩人に、牛肉と茴香酒の薫あり。余は日本橋魚河岸の大鮪の切り身にも、赤き血滴る詩を思ふ。昔の江戸人に代る、新しき東京人の起らざる可らず、時を越えるも、世を跳ぬるも宜し。此書江戸子の為めに大提灯を持つ、蓋し過ぎし江戸の草場の蔭を照すに非ざる也」とあるように、明治四〇年代の大都会の、変化し「化粧を凝らす」現代の姿を、品川・道灌山・亀戸・須田町・銀座などの町、義太夫と浪花節・唐辛子と納豆・理髮床・芝居・都会の公孫樹など花外の目に映った風俗に注目して詩的な言葉で洒脱に綴る。要所要所にモノクロのスケッチと色刷り木版画を挿絵として配す。

『社会主義詩集』出版・発禁の後、明治三八年から四〇年頃までは、詩集『ゆく雲』（隆文館、明治三九年）などの出版や、新聞・文芸各誌に旺盛な文筆活動をおこなうが、大正期に入ると『日本英雄物語』（中央書院）など大衆

的な読み物の執筆が多くなる。<sup>\*29</sup> 大正一二年に明治大学の校歌「白雲なびく」の作詞をするが、最初の結婚に失敗し、再婚の妻は病死、関東大震災で原稿をすべて焼くなど、昭和期に入るともはや花外の名を知る人も少なくなり、アルコール中毒がすすんで保護され、最後は東京市養育院で亡くなった<sup>\*30</sup>（昭和一八年）。花外の『東京印象記』の最終章は綱島梁川の墓所探訪記であった。この綱島梁川も金尾文淵堂とは浅からぬ縁をもった人物である。

### 綱島梁川

金尾文淵堂の刊行物で成功した書物の一つが綱島梁川『病間録』（明治三八年）だった。文学・美学・美術をはじめとして倫理・宗教まで幅広い評論活動を展開し注目を集めていた、梁川の宗教思想関係のエッセイを集めた『病間録』は多くの読者を得た。

綱島梁川（一八七三―一九〇七）は、明治六年岡山県生れ、一四歳のときキリスト教の洗礼を受ける。東京専門学校に学び、坪内逍遙の家に寄寓し『早稲田文学』の編集を手伝いながら、逍遙や大西祝らの直接的な指導を受ける。二三歳のとき結核に冒され、以後病魔と闘いつつ猛勉強をし、美学・文学・宗教に関する論考・エッセイを発表。『病間録』に収められた「余が見神の実験」は彼の宗教的体験を綴ったもので、宗教熱・哲学熱の横溢していた当時の人々の注目を集め、是非論をまき起こした。死の二年前に『病間録』は出版されたが、薄田泣菫宛の手紙に「目下病間録校正中小著ながら出来の上は御覧を仰ぎ度とたのしみ居候」とあり、完成を楽しみにしていたことがわかる。また、その造本についてのやりとりも書簡からわかる。校正と造本・装丁を担当した東京専門学校校の望月

世教に宛てて「折角の御注意に候へども肖像掲載の件は見合せ度あしからず願上候」と口絵の肖像は止めてほしいといい、続けて「背文字の篆字（余りひねくらぬ解り易き）は御案の如く面白きかと存候一つ見本やうのものを得られ候はば好都合」と書き送っている。<sup>\*31</sup>仕上がった本は、梁川が望んだ「高雅の体裁」にふさわしく、濃紺のクロスに篆字をデザインした文字で金箔を押した角背本となった。反響も良く発売後まもなく三刷になった。

金尾文淵堂は、翌三九年に『回光録』も刊行し、生前の梁川と深いつながりをもった。いつからだれの紹介で関係を深めたのか、松村緑は前掲書で、明治三五年冬に『新人』に寄稿した梁川の文を読んだ薄田泣菫が所感をはじめて書き送り、以後文通が続いたと記す。しかし、『小天地』を見るとすでに明治三四年一月号に梁川の「詩論一則」というエッセイが載る。とすると編集長だった泣菫がそれに無関心だったはずはなく、三五年以前から関係があったと考えなければならない。あるいはその著作に共感した金尾種次郎が直接接触したのかもしれない。金尾が宗教心の厚い人物であったことは、広津和郎ほか多くの人が記している。「思西」という号は、母を早くに亡くした金尾が極楽にいる母を思うとしてつけられた。金尾自身が梁川に原稿を依頼した可能性も残されているが、やはり泣菫が早くから梁川に注目していたと考えるべきだろう。

児玉花外『社会主義詩集』発禁に寄せた綱島梁川の「同情録」の一文や、平尾不孤への弔文（「平尾不孤君を弔す」<sup>\*32</sup>）からは文淵堂の文学グループの交友がうかがえる。薄田泣菫は梁川の訃報に接してただちに「綱島梁川君を弔う」<sup>\*34</sup>を書く。死者に対する深い理解と友を失った悲しみが綴られ、児玉花外は『東京印象記』で雑司ヶ谷の新墓地に立って次のように回想している。<sup>\*33</sup>

……私が梁川氏を訪ねたのは、明治三十九年の、梅の花がチラホラ咲出す頃であつた。平常花好きの氏の庭には、数種の花が開いてゐた。座敷の中にも花瓶の綺麗なのに、美しい紅い花が挿されてゐた。

梁川子は、真白い雪の大な塊の如な蒲団に、瘦せて清らかな身体を持せかけて、甚だ青白うはあるが、例の人懐つこい温顔で、自分を迎接へられ、種々と、文学、宗教の有益なる話を聞かされた、忘れもせぬ此時斗りは、厭世と不平とに頭臚が火の如に苦しい私も、平和な春風の裡に在るの思ひで、額の青い秋の濤の皺も伸びて、幾度か嬉しい微笑を禁ぜなかつた。

網島梁川の『病間録』の出版とその死は、当時の知識人をはじめ多くの人々の話題になった。キリスト者を中心として梁川会なるものが各地につくられ、彼の「見神の記」をめぐって仏教学者を含めて様々な批評が展開された。文淵堂はそれらを編集して単行本（『病間録批評集』『見神論評』）を刊行した。熱心な仏教信者の金尾がキリスト教の本を出すなど、その後の宗教思想関係書の出版を方向づける意味で梁川が存在は大きかったといえるだろう。

江戸時代以来の仏教書肆を受け継いだ金尾種次郎が自らの趣向で文芸出版社を志して、再出版を企てた、いうなれば「近代」出版へと一步を踏み出したのは明治三二年のことだった。その原動力となったのがいままで見てきたような平尾不孤と薄田泣菫、児玉花外、網島梁川らとの出会いとお互いの交流であつた。彼らは今では忘れられた存在だが、文淵堂の出版物には彼らの、明治三〇年代の文芸観や社会観、信仰や思想が渦を巻いていることはたしかだ。金尾が彼らに注目し、ここを出発点としたことが金尾文淵堂という出版社の性格の一面を表すことになる。人的なつながりは企画の連鎖を生み、出版社のエネルギーとなる。金尾も含め彼らは当時みな二〇歳代であつた。

早世した不孤や梁川、やがて泣菫も病（パーキンソン氏病）に冒されていき、花外は悲憤慷慨しつつ巷に沈殿していく。金尾種次郎は雑誌『小天地』に家産のすべてをつぎ込み、破産に近い状態で東京へと転進していく。

## (2) 俳句同人誌から文学雑誌へ

### 幼なじみの俳句青年たち

ここで一旦過去にさかのぼり、金尾種次郎が平尾不孤らに会う以前のことに触れなければならない。明治三二年一月に『ふた葉』を創刊したとき、四月生まれの金尾種次郎は二〇歳に満たない若さであった。自ら俳句・短歌をたしなむ青年で「思西」あるいは「春草」と号した。そのころの俳句の仲間に青木月斗（兎）、山中北渚がおり、彼らは金尾種次郎と同年生れで、創刊時の『ふた葉』の編集仲間だった。後に文淵堂の挿絵を多数手がけることになる画家の赤松麟作も一歳年上だが彼らの仲間で、明治二九年の秋、東京美術学校（芸大）に入学が決まり大阪から発つ時のこととして、「小学校の友人青木新護（月斗） 山中種蔵（北渚） 金尾種次郎（文淵堂）（皆故人に成つてしまつてゐる）に送られて上京」と記すので、子どものころからの友人だったことがわかる。<sup>\*35</sup>

彼らは『ふた葉』創刊後の四月に雑誌支援団体「文淵会」を結成し、その主力メンバーになった。彼らは文淵会の春季・夏季大会を企画し、郊外へ遊山に出かけたりしながら始終競吟し、雑誌の編集に関っていたことが『ふた葉』の記事からわかる。文淵会は各地に支部も作っていた。

思西あるいは春草の名で金尾種次郎の短歌や俳句、紀行文が『ふた葉』に掲載されているのは第一巻第三号から同第六号までである。第一巻六号の「金剛山行き」記事は当時の文淵堂の二階の様子を髣髴とさせる。青木月兎・



金尾春草・山中北渚、西田岐水の四人がリレー式に紀行文を寄せたもので、冒頭に明日の山行きを楽しみにする仲間のように月兎によって描かれている。

金剛山に登るべく、五月三日春草庵（文淵堂二階——筆者注）に集る者鬼史、方外、岐水、月兎、北渚の五人及び他に方観、井蛙之を送るべく来る。草履、弁当、手帳の用意とさわぎ、或は大和名所図絵を見或は、名勝記を評しつゝ、夜も更けんとして観、蛙去る、一同、楼上に小宴を開き、以て明日の行を盛ならしむ、月兎例の如く一題十句を為さんと発言すれば、即ち桑の机を中央に置く。主人（金尾——筆者注）は楼下に寝るもの、如し、五人与益加はり、時のうつるを不知、漸く北出の大時計三時を報じて、眠につかんとす。<sup>\*36</sup>

青木月斗（一八七九—一九四九）は名を新護、初め月兎のちに月斗に改めた。家は薬種業で大阪薬学校卒業後、道修町に住み『ふた葉』の創刊に協力する。薬業をつづけながらやがて大阪俳壇の重鎮となる。俳誌『車百合』を『カラタチ』同人」と改題して経営した。「大阪俳壇は文淵堂の二階から出てゐた」と自ら語っているように、金尾文淵堂の二階は文学青年たちのたまり場で、『ふた葉』は当初、俳句を中心とする投書雑誌であった。<sup>\*38</sup>三二年夏には、彼らが師と仰ぐ子規の病氣平癒のための祈祷会（為果物八題花二題を課して運座）を文淵堂で徹夜で行った。<sup>\*39</sup>

正岡子規の本が文淵堂で後に刊行されるが、子規と金尾との出会い「文淵会」の俳句仲間と深く関わっている。『ふた葉』第一巻五号には、文淵会のメンバーで金尾や月兎らより年長だった松瀬青々が上京して河東碧梧桐の紹介で子規を訪ね、句を詠んだ記事が載る。青木月兎も同三二年の暮れにはじめて子規を訪ねたときのことを書き残

す。<sup>\*40</sup>

金尾種次郎が明治三四年一〇月二三日夕刻に、奈良漬を手土産に子規を訪れたことを『仰臥漫録』は、

夕刻大坂ノ文淵堂主人来ル手土産奈良漬一桶

左千夫ト共ニ晚餐ヲ喫ス<sup>\*41</sup>

と記す。このとき「俳諧叢書」第一編を俳書堂と金尾文淵堂で共同発行することを打ち合わせたのかもしれない。同叢書は三四年一二月から三五年にかけて四点が発行された。<sup>\*42</sup>

また大正三年に『子規随筆』（正岡律子編）を刊行、子規の『俳人芭蕉』という豪華本（明治三九年以前刊行——筆者未確認）については、斎藤昌三が次のように書いている。

この文淵堂から出た数ある豪洒本の中で、今日最も珍重に属するものは子規の肉筆のまゝを複製した和紙刷りの『芭蕉』である。同じ子規の日記をそのままに複製した、岩波の『仰臥漫録』は、その量と犠牲に於ては『芭蕉』以上の努力を払っているが、金尾の先鞭と良心とは高く買うべきである。<sup>\*43</sup>

このように金尾種次郎は、当初俳句・短歌の同人誌的な雑誌を作ろうとして『ふた葉』を創刊したのである。この俳句路線は基本的には継承されるが、雑誌『ふた葉』は先述した平尾不孤ら毛色の異なる人間たちと出会うことによってどのように変化していったのか。

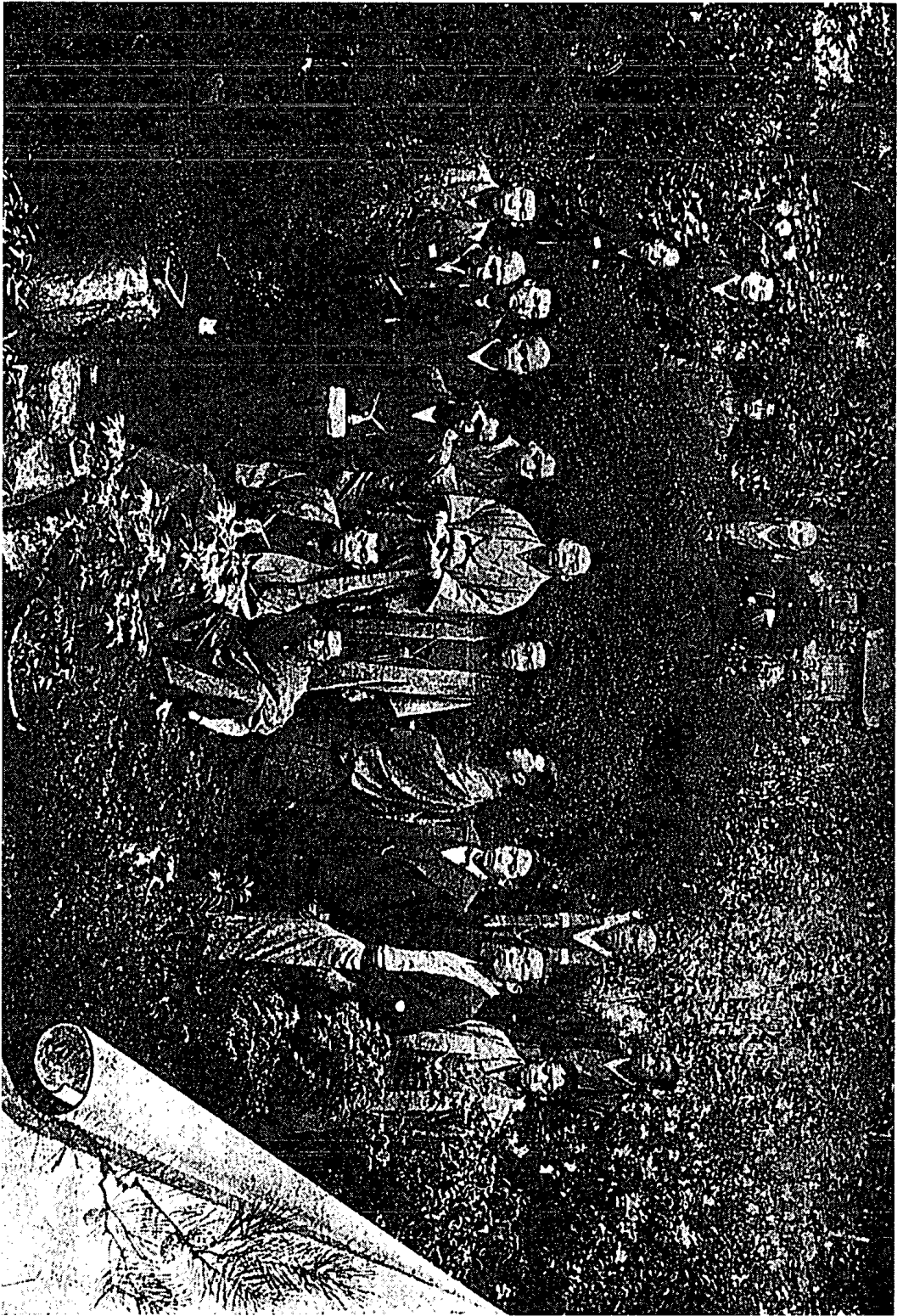


図2 文淵会第二例会の集合写真。金尾種次郎は中列半ばで横を向いている人物。その左隣に松村鬼史、他に山中北渚（中列の右端）、青木月兎は前列左（座る）。『ふた葉』第二巻一号（明治三二年七月）より。

## 『ふた葉』と『小天地』の編集方針

先述したように、この二つの文淵堂の文芸雑誌については、藤田福夫がそれぞれの総目録を提示し、明石利代も前出論文で明治三〇年代大阪の文学雑誌の中に位置づけて論じている。彼らの研究に拠り、『ふた葉』を詳細に検討しながら、文学史的観点ではなく金尾文淵堂の編集活動に焦点をあてて雑誌の変容を追ってみたい。

『ふた葉』は明治三二年一月に創刊され、終刊は翌三三年六月で、その三ヵ月後の一〇月に『小天地』が創刊される。『小天地』の編集形式と『ふた葉』の第三卷（三三年一月）以降の形式がほぼ同じであることから、『小天地』は『ふた葉』を改題刊行したものと考えられている。

『ふた葉』はまず最初金尾と少年時代以来の友人、青木月斗や山中北渚、松村鬼史ら俳句青年たちで組織した「文淵会」を中心に編集がおこなわれた。文淵会は各地に支部も作り、発足当初の七号までは若者の投書的・同人誌的性格が強く、なかでも俳句のウエイトが大きかった。文淵会への高額（一円）出金者に、月斗と鬼史が名を連ねているのもこのことを物語っている。<sup>\*44</sup>

『ふた葉』の記事に変化が表われ、俳句の同人たちを中心とする編集体制にわずかな変動が起るのは、二卷二号（明治三二年八月）からである。この号には角田浩々歌客（当時『大阪朝日新聞』文芸記者。後述）の文淵会講演「翻訳文学『夜航船』について」の記録と作品が掲載され、文淵会夏季大会にライバル関係にあった「関西青年文学会」と「青年文友会」のメンバーが来席、「我が大阪に於ける三文学会會員の一堂に会せしは実に文淵会夏季大会を以つて創めとす」と、先輩格の『よしあし草』（明治三〇年創刊）の母体である関西（浪花）青年文学会との交流がおこなわれた記事（関西青年文学会を代表して西村酔夢（真次）が演説し、興がのると剣舞を舞ったとある）、そして

『ふた葉』の主要部分を占めていた「俳壇」が独立して新しく俳誌『車百合』を刊行するとの予告記事を載せている。

次号の第二巻三号には、初めて平尾不孤が登場し「英文学史の研究を促す」と題して評論を執筆、「関西文壇には実質が無い」との主張を展開する。また薄田泣菫も初めて新体詩「子狐」を発表し、この号以降薄田泣菫はほぼ毎号登場する。次の第二巻四号には後藤宙外の評論「文士と老衰」、翌三三年一月の第三巻一号には泉鏡花の小説が載るなど東京方面の文士たちの寄稿が急速に増える。またこの二巻四号には「文学同好会」が結成されたという記事が載る。これは藤田福夫によれば、文淵会とは別組織で須藤南翠、菊池幽芳、三木天遊などが加わり、幹事は山本郭外、平尾不孤、金尾思西（種次郎）<sup>\*45</sup>だったという。次の第三巻二号には与謝野鉄幹の詩、児玉花外の詩というように、明らかに八月以降、執筆者の顔ぶれに変化がおき、大阪文壇に限られなくなっていく傾向が強まる。

そして先の予告のとおり三二年一〇月には、青木月斗発行の俳句雑誌『車百合』が創刊される。発売は金尾文淵堂である。

これら一連の変化、つまり誌面に小説や詩が次第に増え、評論が充実していく様子を良く観察すると、『ふた葉』の編集主体が青木月斗ら俳句グループから、平尾不孤や角田浩々、薄田泣菫へと移っていく様子がうかがえる。この編集上の改革には、金尾種次郎が主体的に関わっていたはずである。編集責任者の金尾にとって古いなじみの俳句仲間との関係を整理し、新しい文芸雑誌として『ふた葉』を刷新していくためには戦術が必要であり、相当な神経を使ったと思われる。彼自身これについて一言も残していないので推測だが、角田浩々歌客の文学講演、新俳句雑誌の予告、平尾不孤の評論、薄田泣菫の登場、文学同好会の結成と次々と手を打ち、俳句グループを刺激しない

ように『車百合』を別に創刊するなどは『ふた葉』が文学雑誌として脱皮していく明らかな布石であった。

一般に雑誌の編集方針の大きな変更はトップを代えることによって成し遂げられる。三三年一〇月創刊の『小天地』で自らは退き、編集責任者を薄田泣菫としたことは金尾の出版戦略だったと思われる。同志的結束で編集活動を行ってきた俳人仲間を体よく排除し編集の実権を移行させる離れ技は、出版者が確信を持たねば簡単にできることではない。その確信は、平尾不孤を介して薄田泣菫と出会い、その詩に金尾自身が感動したこと、そしてすばやく『暮笛集』（三三年十一月）を編集刊行し、それが幸運にも成功し、また、不孤が唱える大阪文壇批判の中に俳句青年たちの「狭さ」<sup>\*46</sup>があり、金尾もそれに動かされたことによって生れたと思う。『暮笛集』の成功の要因の一つは、先述した平尾不孤の「『帝国文学』記者に与ふる書」をきっかけとする後藤宙外ら『早稲田文学』派と『帝国文学』派との論争によって、薄田泣菫の名とその作品への関心が高まったからと言えないことも無い。

新雑誌『小天地』はこのような意味で、後期『ふた葉』の延長上にあるといつてよい。大きな変化は編集責任者とページ数で、『ふた葉』第三巻の八〇ページに対して『小天地』第一巻は一六〇ページと倍増する（やがて二〇〇ページを越える）。またかの文淵会は『小天地』刊行時には消滅した（すでに『ふた葉』三巻から文淵会のPRは極端に縮小された）。

『小天地』は三三年一〇月創刊で三六年一月終刊（通算二五号）である。次第に関西出身以外の文士の寄稿が増え、いき、表紙の装丁や挿絵もさらに洗練する。小説では小杉天外・菊池幽芳・川上眉山・小栗風葉・柳川春葉・泉鏡花・徳田秋声らを中心に国木田独步・島崎藤村・永井荷風らが加わる。随想には綱島梁川・高安月郊・松崎天民・水谷不倒らを中心に坪内逍遙・幸田露伴・徳富蘆花らが加わる。韻文では薄田泣菫・河井醉茗・児玉花外・三木天



図3 薄田泣菫（左）、平尾不孤（中）、角田浩々歌客（右）。  
京都にて。『小天地』第一巻第四号より。

遊らのほかに横瀬夜雨・沢村胡夷らも見え、  
短歌では新詩社詠草と題する与謝野晶子・与  
謝野鉄幹・山川登美子らが名を連ね、『明星』  
（明治三三年創刊）との連携が明らかである。  
俳句は縮小されて一つの欄となり、関西系で  
は松瀬青々・水落露石を中心に青木月斗らの  
ほか、東京その他として虚子・鳴雪らの句が  
並ぶ。

#### 『よしあし草』と『小天地』

あきらかに「東京志向」が強まった『ふた  
葉』と『小天地』はどのように評価されてき  
たのか。『近代文学雑誌事典』（至文堂）の  
「小天地」の項目が石川啄木の一号雑誌と混  
同されていたように、近代文学史上ほとんど  
忘れ去られた雑誌だった。

明石利代は、『小天地』が当時、他の雑誌

『帝国文学』や『明星』でどのように評価されたかを紹介しながらその性格について考察している。それによると、『ふた葉』が刊行される以前に大阪には文学雑誌『よしあし草』（明治三〇年創刊、三三年九月『関西文学』と改題し、三四年まで三三三号）があり、これは関西（浪花）青年文学会の機関誌として大阪を中心とする文学運動のなかで生れた。河井醉茗は当時を回想して、「それ以前から『文庫』の記者ではあったが、未だ郷里堺の家との縁故が切れず、東京と堺と掛持ちのやうな生活をしてゐたので、堺へ帰ると関西文芸の発展といふ事に手を出した。恰も高須梅溪（芳次郎）、中村春雨（吉蔵）、西村醉夢（真次）小林天眠の諸氏が『よしあし草』を刊行し始めたので、意志の疎通を計つて同人に加わり<sup>\*47</sup>と述べてその同人の名を記す。

『よしあし草』の同人、小林政治（天眠）は「われらの『よしあし草』に対する唯一の好敵手ハ、心斎橋の金尾文淵堂主人、金尾思西君がやつて居た文学雑誌「ふた葉」、後に改題した『小天地』でありました」と二つの文芸誌がお互いに張り合っていたことを述べている。<sup>\*48</sup>

明石利代は、金尾文淵堂を発行所とした『ふた葉』と「文淵会」のありかたが、『よしあし草』と関西青年文学会の関係のように文学運動的な組織と成立事情をもつかと問題を立てる。金尾思西がもともとは関西（浪花）青年文学会にいたことや、その支部のひとつ葦葉団のメンバーらが文淵会の主な存在になること、『ふた葉』に次第に後藤宙外や泉鏡花、与謝野鉄幹ら中央を拠点とする者の寄稿が目立つようになり、「大阪の土地とは無縁なのがはつきりたどれる」とし、「この点は『よしあし草』と異なる所」で、このような推移はもともと『ふた葉』には『よしあし草』に於ける関西青年文学会のような強い組織がなかったからではないかと述べる。『小天地』は一層その傾向が強まり、小杉天外・田山花袋らの小説は載つても『帝国文学』の評者がいうように駄作に過ぎず、『小天地』のこのよ



うな性質に比べると、作品に傑出したものがなくても「大阪を地盤に新人の発表の場としての立場を最後まで維持し」た『よしあし草』こそ注目に値すると結論づけている。<sup>\*49</sup>

この評価はおそらく文学史的観点からいって、また中央対地方という構図のなかで大阪文芸の独自の発展を見ようとする観点からすればその通りといえよう。しかし、私のように、一つの出版社がいかなるモチーフによって立ち上がり、著者群はどのように形成され、それが出版物の傾向や特色となつてどのように表われるかに関心を持つものにとって、『ふた葉』『小天地』という文芸雑誌は『よしあし草』に増して興味深いものとなる。歴史的な関心からいえば金尾文淵堂が明治三六年一月、おそらく経営悪化のため『小天地』を終刊し、東京に店を移して再起を図ろうとした意図を知りたい。また金尾が経営的な困窮の結果とはいえ、関西と東京を往還するように出版活動を行つたことについても考察を加えてみたいと思う。

### (3) 新聞小説と金尾文淵堂の小説本戦略

金尾文淵堂の初期を構成する二つのグループを検討して来たが、大阪から東京へと展開する過程でもうひとつ重要な執筆者のグループがあった。それは角田浩々歌客・中村春雨・菊池幽芳・柳川春葉と、河井醉茗・与謝野鉄幹・晶子らである。与謝野鉄幹・晶子夫妻とは特別に親しく、長いつき合いが続いた。明治三三年八月に鉄幹が大阪に来たときに金尾種次郎がはじめて会つて以来のことで、与謝野家との関係はすでに多くの証言が残されており、<sup>\*50</sup>ちに徳富蘆花とともに論じることとし、ここでは前者の人々に注目したい。

## 角田浩々歌客

角田浩々歌客（一八六九～一九一六）は、静岡県富士郡大宮生れ、本名謹一郎。慶応義塾文科中退後、明治二〇年代半ばから『国民之友』に文芸批評家として不二行者の筆名で創作・評論を発表。明治三二年『大阪朝日新聞』記者となり、三八年『大阪毎日新聞』に移り、学芸副部長、さらに大正元年『東京日々新聞』に学芸部長として転出した。<sup>\*51</sup>

金尾種次郎よりも十歳年上だった角田は『大阪朝日新聞』の記者時代から金尾文淵堂と接触し、『ふた葉』への登場は先述のとおり二巻二号（明治三二年八月）で、「夜航船」の翻訳と文淵会の夏季大会での講演の記事が載る。『ふた葉』の編集方針の転換に関わり、『小天地』創刊時（三三年一〇月）に薄田泣菫、平尾不孤とともに編集者の一人となった。『小天地』には毎号評論等を掲載した。また明治三四年六月に『出門一笑』を、明治四〇年に『鷗心録』を金尾文淵堂から刊行した。

年齢や経験から考えて金尾文淵堂の出版活動のお目付け役として重要な役割を演じたと思われる。彼の人柄を伝える話として、松崎天民は自伝『同棲十三年』において、「浩々歌客足下」と語りかける文体で若き日のことを以下のように綴っている。<sup>\*52</sup> 金尾種次郎とも関わりのある部分を抽出して紹介すると、

「時に小生は大阪新報の三面探訪記者で、月給正に十四円、その前年（明治三十三年）八月十日、足下の尽力に依つて、始めて新聞屋さんに為つてより」

「当時の事は大概御承知と思ひますが、花嫁が着て来た晴の衣裳は、その友達の井上おじょうさんの借物でし

たし、花婿たる小生の来た鼠繙銘仙の単衣に同じ羽織も、文淵堂主人金尾思西君からの借着でした」

「花婿たる小生の財産は、壊れかかった支那鞆が一個あつたのみでした。長い竹の台の附いた五文心の置洋燈と、小さな戸棚一個は、足下を始め薄田泣菫、結城桂稜、菊地三巴、金尾思西五氏からの到来物で……」

「当時、足下と薄田泣菫、平尾不孤の三家に依つて、金尾文淵堂より発行した文藝雑誌「小天地」あつたがために、漸く小生の記者生活は事無きを得ましたが、一家の生計は窮乏と困苦とを極めました。新聞社から受ける十九円の給料と「小天地」より受ける毎月四、五円の手当」

「結婚前には幾月間か、足下の許に寄食しましたし、また足下の紹介によつて渡辺霞亭翁の許へ寄食した因縁がありましたので、小生は足下と霞亭翁との尽力に依つて三十六年一月中旬、大阪朝日新聞社へ入社するこゝとが出来ました」

松崎天民が角田浩々歌客の食客として就職の世話までやいてもらった感謝の気持ちや、『小天地』に社会ルポを書いて手当をもらっていたこと、金尾種次郎から結婚式の着物を借り、結婚祝の道具をもらったことなどがわかる。<sup>\*53</sup> 金尾は才能ある筆者（たとえ無名でも）の面倒をよくみたことを物語るエピソードだろう。

もうひとつ、薄田泣菫が角田浩々の突然の死去（大正五）の知らせを聞いたときのことを随筆に記しているので一部分を掲げる。

私と角田君との交際はかなり長いうだ。曾根崎の小さな露地で君に会ったのは、今から十七年も以前のこ

とだ。君はまだ独身で、国元から阿母さんを引き取り、二階の一室には松崎天民君を世話したりなどしてゐた。（中略）今から十五、六年前、私たちは一緒に雑誌を編輯してゐたことがあつたが、何か相談事でもあつて皆の顔が揃ふと、君はいつも小僧を呼んで、襪のような財布から銀貨を攫み出して、掌面の上にそれを置いた。

「済まないが、お酒を一本ね」

酒がくると、それをちびりちびり嘗めながら、空突飛な私たちの意見と打って変つた穏健な節を述べたものだ。どんな場合でも、どんな事にでも、君はいつも穏健な立場を失はなかつたが、酒を飲むとなほ一層穏健になつた。そして酔が廻ると、肘を枕にしてころりと横になつてしまつた。<sup>\*54</sup>

おそらく文淵堂の二階の編集部屋でのことだろう。年長で穏健な角田浩々歌客は若い出版社にとって貴重な存在だつただろう。

文淵堂の刊行書目とその執筆人脈から見えてくるものの一つは、角田浩々のような新聞社の文芸記者との連携、そして新聞小説を文淵堂で単行本化するという戦略である。角田は『大朝』から『大毎』へと移籍し、学芸部長を努めるなど新聞社に顔が広く、かつ文淵堂の雑誌の顧問をも兼任していたので、金尾文淵堂と大阪の新聞社ことに『大毎』との結びつきには深いものがあつた。ここに文淵堂の小説本の筆者人脈が形成される素地がある。

文淵堂の執筆者の内、『大毎』系の記者には、角田浩々をはじめ菊池幽芳、水谷不倒がおり、『大毎』の懸賞小説で一等当選の中村春雨（吉蔵）、話題の新聞小説『生さぬなか』（大正二年、文淵堂刊）の筆者柳川春葉がいる。『大朝』系には、古参記者の須藤南翠（光暉）がおり、『朝日』の懸賞当選小説を単行本化したものに大倉桃郎『琵琶

歌』（明治三八、文淵堂刊）、田村俊子『あきらめ』（明治四四、文淵堂刊）がある。そのほか、明治三〇年代初め『大阪新報』記者だった松崎天民（のち朝日新聞記者）が『小天地』に社会ルポを書き、金尾から手当てをもらっていたことはすでに見た。木下尚江も文淵堂から六冊の新聞と再版本を出しているが、毎日新聞記者として新聞小説を書いていた。このように金尾種次郎は、新聞記者と密接な関係を結びながら、新聞小説の単行本化という出版戦略をもっていた。

### 「家庭小説」という新聞小説

『大毎』は明治二年（一八八八）の創刊である。前身は『日本立憲政党新聞』改め『大阪日報』であった。先行する『大阪朝日新聞』（明治一二年創刊）のあとを追って、政治色を払拭し実業新聞としてスタートした。初代主筆は東海散士柴四郎だったが、柴は編集に本腰を入れず新聞は振るわず、まもなく交代劇があつて渡辺台水が主筆社長になり、改革がおこなわれる。以下、高木健夫『新聞小説史』<sup>\*55</sup>『大阪毎日新聞五十年』（大阪毎日新聞社、昭和七）等を参考に新聞と出版（金尾文淵堂）との関係を拾ってみる。

のちに金尾文淵堂とも関わる菊池幽芳（一八七〇～一九四七）は茨城県水戸の出身だが、渡辺台水に誘われて四年に『大毎』に入社した。『大朝』ではすでに渡辺霞亭や西村天囚が大衆的な小説を次々に連載していた。『大毎』でも渡辺台水が新聞政策上連載小説を重視し、菊池幽芳に外国小説の翻案をするよう指導し、「光子の秘密」を書かせて連載（明治二五年～二六年）、人気を博する。以後菊池幽芳は「みだれ髪」などを次々に手がけていく。明治二六年に渡辺台水が結核で死去するが、『大朝』に対抗するために三〇年、原敬を編集総理（翌年社長）に迎える。原

敬は漢字制限・口語体で書くことを積極的に推進し、相撲開催や懸賞小説などのイベントで『大朝』を追撃した。新聞小説では明治三二年の菊池幽芳「己が罪」の連載が大評判になり、連載小説の良し悪しで発行部数が左右される状況がうまれる。小説を書く新聞記者はひっぱり風であった。

明治三〇年代前半に話題の新聞小説を挙げれば、

読売新聞 尾崎紅葉「金色夜叉」 明治三〇～三五

国民新聞 徳富蘆花「不如帰」 明治三一～三二

大阪毎日新聞 菊池幽芳「己が罪」 明治三二～三三

萬朝報 黒岩涙香「巖窟王」 明治三四～三五

があり、『金色夜叉』は連載当時から幅ひろい読者に圧倒的な人気を呼び、蘆花の『不如帰』は連載後、民友社で単行本にしてから爆発的に売れた。『己が罪』も『大毎』の発行部数を増大させたといわれた。

菊池幽芳は『大毎』の文芸部主任（明治三〇）から社会部長、副主幹兼学芸部長など、『大毎』の要職を歴任した。その一方で『小天地』の賛助会員の一人に名を連ね、同誌に小説や雑文を寄稿しつづけ、三四年には金尾文淵堂からの『よつちゃん』を刊行。文淵堂が東京に移つてのちも三八年に『妙な男』前・後編、四一年『月魄』、大正二年『百合子』三巻、大正四年『小ゆき』四巻を刊行し、長く金尾とのつき合いが続いた。

金尾文淵堂が『小天地』を初めとして、単行本でも尾崎紅葉の硯友社系作家の作品を多く取り上げてきた理由ははっきりとはしないが、菊池幽芳の幹旋があつたのではないかと思う。菊池幽芳は明治二六年、京都でひらかれた関西新聞記者懇親会の席上で、尾崎紅葉とはじめて会い新聞小説家同士として意気投合する。ときに紅葉二七歳、

幽芳二四歳である。親交は長く続き（紅葉の死後、その次男と幽芳の三女が結婚）、幽芳が三〇年に『大毎』の文芸部主任になったとき、『大毎』は社員の小説記者の作品以外載せないという不文律を破って、東京の硯友社系の作家を連続して起用した。紅葉の斡旋があつたと高木健夫はいう（前掲書）。それを引用すると、

広津柳浪「心中二つ巴」（三三・一・一六―四・六）

泉鏡花「通夜物語」（三三・四・七―五・八）

小杉天外「娘ごころ」（三三・六・二八―八・一六）

ここに幽芳の「己が罪」（前編）がはさまる

小栗風葉「黒装束」（三三・一〇・二二―二二・三二）

となっている。問題はこの『大毎』連載のあとに続くように金尾文淵堂の『ふた葉』『小天地』に彼らは登場するのである。明治三三年一月の『ふた葉』に、泉鏡花「弓取町人」、同年三月に広津柳浪「夜泣峠」、同年一〇月の『小天地』一号に小杉天外「花ごころ」、一二月の第二号に泉鏡花「政談十二社」という具合である。『小天地』の客員的な存在だった菊池幽芳が金尾文淵堂と硯友社の作家の間を取り持ったと考えることも十分に可能だろう。

『大毎』の懸賞小説の第一等となり金尾文淵堂から小説を出しつづけた作家に中村春雨（吉蔵）（一八七九―一九三二）がいる。春雨は金尾種次郎と同年、鳥根県津和野生れである。明治二九年、大阪に来て大阪郵便局貯金管理所の書記補をつとめながら小説を書く。三〇年に郵便局で同僚だった高須芳次郎（梅溪）らと浪花青年文学会を結成し、雑誌『よしあし草』を発行、三二年に上京して広津柳郎に入門する。広津家に寄寓して東京専門学校へ通った話は広津和郎が書いている。<sup>\*56</sup>翌三三年、『大毎』の懸賞小説に応募し、『無花果』が第一等に当選。新聞連載後に

金尾文淵堂から単行本を発行し好評を得た。春雨は『よしあし草』の同人だったが、三三年三月の『ふた葉』第三卷二号に「思西君に与へて関西文壇を論ずる書」を寄稿し、『小天地』にも小説を発表する。またクリスチャンだった春雨は文淵堂から『新約物語』（明治三九）、『旧約物語』（明治四〇）、小説『密航婦』（明治三九）を刊行している。

柳川春葉（一八七七―一九一八）も文淵堂から多数の小説を刊行している。春葉は東京下谷の生れ、紅葉門下で泉鏡花、小栗風葉、徳田秋声とならぶ四天王とよばれた。明治三八年くらいから『東京日日』『東京朝日』などに新聞小説を書き、大正元年に『大毎』で連載した『生さぬなか』が大人気となり、菊池幽芳の『己が罪』以来のヒットとなる。『大毎』の部数は伸び、「生さぬなか」の名を冠した饅頭やせんべいが氾濫し、新派悲劇のドル箱的存在となった。<sup>57</sup>春葉は『大毎』の専属作家として優遇された。その『生さぬなか』の単行本化を金尾文淵堂がおこなった。しかし文淵堂との関わりはそれ以前からあり、すでに明治三四年の『小天地』第一卷五号と二卷一号に小説を発表している。単行本では『縁の糸』（明治三九）『花売女』（大正元）『女一代』上下（大正二）、『かたおもひ』『母』（大正三）を文淵堂から刊行。大正八年に柳川春葉が亡くなると金尾文淵堂は『春葉全集』を編んでいる。

これらの大衆現代小説は当時「家庭小説」とよばれた。蘆花の『不如帰』をその原点として、菊池幽芳の『己が罪』でその形が整い、中村春雨、柳川春葉とつづく一連の家庭小説は、日露戦争後の自然主義文学全盛時代には通俗的で文学としてみるべきものがないと切って捨てられ、次第に作家の名前とともに忘れ去られた。しかし家庭小説はいわば現代のTVのホームドラマやメロドラマに通じるような物語の枠組みをもっており、死に絶えた文学形式とはいえない。家庭小説とメディア（新聞・出版・新派演劇など）が内包する問題についてはさらに掘下げて考



える必要がある。金尾文淵堂がこうしたジャンル小説をラインアップしていったのは時代の偶然だけではないだろう。

文淵堂と新聞記者とのコンタクトは深かった。小なりといえども文淵堂が雑誌を発行していて、そこに現役の新聞記者（角田浩々歌客、菊池幽芳、松崎天民ら）が参加していたことが、懸賞小説の選考や受賞者との接触のための情報入手に有利だったともいえる。しかし、彼らとのつながりがもたらしたのは、実務面以上のものがあっただろう。当時の作家あるいは新聞記者という存在のあり方が現在とは異なり、職能は未分化で流動的であった。作家は小説や詩だけを書くのではなく、記者として取材にも出かけ、批評もすれば翻案もし、また自分達の文芸サークルの活動も活発におこなうといった多角的な動きの中で創作を行っていた。新聞記者も個人の顔をもって創作や論争に参加し、会社で記事を書く以外に活躍の場をもっていた。また、文学と美術との境界もそれほどはっきりとせず、同じ土俵で批評が行われるなど芸術的価値の階層化が押し寄せる直前の状況だった。そういう未分化な面白さを金尾文淵堂はまるごと本にして残しているのである。金尾文淵堂の執筆者人脈のつくり方に、過渡的な混沌が認められるのは金尾が大阪を拠点としたからかもしれない。この面白さは同時代の東京の春陽堂や新潮社とは明らかに違うものだ。

本稿はここで筆を止め、次回以降は第二期・三期を中心に、金尾文淵堂の本に結集した画家・版画師のグループ、社会主義者グループ、新仏教運動グループ、与謝野家と徳富蘆花、その他の網の目からはみ出た人々などについて順次検討していきたい。

## 注

- \* 1 斎藤昌三「本のはなし」昭和八年、のち『閑板書国巡礼記』所収 東洋文庫、平凡社、一九九八年
- \* 2 足立巻一「文淵堂・金尾種次郎覚書——大阪時代」『文学』一九八一年一二月号、岩波書店
- \* 3 田熊渭津子「金尾種次郎年譜考」『混沌』一九九〇年六月、中尾松泉堂書店
- \* 4 高橋輝次「金尾文淵堂 その人と仕事」上・下（『SANPAN』一九九八年一〇月・一九九九年一月、エディトリアルデザイン研究所）
- \* 5 藤田福夫「文学雑誌『ふた葉』総目録とその内容概観」『椋山女学園大学研究論集』五号、一九七四年）藤田は「近代歌人の研究」（笠間書院、一九八三年）でも金尾文淵堂について記す。
- \* 6 藤田福夫「文学雑誌『小天地』総目録と金尾文淵堂」『金沢大学教育学部紀要』一二号・一三号、一九六六年）
- \* 7 坪内祐三「金尾文淵堂の雑誌『小天地』（『ちくま』一九九六年一二月号、筑摩書房）
- \* 8 現在作成中の刊行図書年譜は複数の主要図書館所蔵目録をベースに実物調査をしている。次号に掲載する予定。
- \* 9 明石利代「明治期大阪での文学雑誌の書誌的展望」『女子大文学』一四号、大阪女子大学文学会、一九六三年）
- \* 10 河井醉茗の回想『醉茗随筆』（起山房、一九四三年）
- \* 11 小林政治「浪華青年文学会について」（『立命館文学』第五卷三号 一九三八年）
- \* 12 大阪の実業家紀志嘉実が運営していた貧しい学生を収容する造士寮の機関文芸新聞。薄田泣菫「太陽は草の香がする」（アルス、大正一五）による。
- \* 13 薄田泣菫「詩集のあとに」『明治文学全集』58巻、筑摩書房
- \* 14 松村緑『薄田泣菫考』教育出版センター、一九七七年
- \* 15 後藤宙外「『帝国文学』記者に答ふ」の中で引用されている『帝国文学』雑報欄の匿名記者の言葉。『新小説』第四年第一二巻、春陽堂、明治三三年
- \* 16 後藤宙外「『帝国文学』記者に答ふ」の中で引用されている平尾不孤の「『帝国文学記者』に与ふるの書」『新小説』前掲\*15
- \* 17 前掲\*15に同じ

\* 18 野口存弥「社会主義詩人・児玉花外」(『初期社会主義研究』一九九九年一二月)に紹介されている。後に『大毎』社員に復帰したときに提出した履歴書。泣菫の子息薄田桂が提供という。)

\* 19 平尾不孤は「浪花文壇を退かざる辞」(『ふた葉』第三卷三号、明治三十三年一月)で、「…不孤が観察したる浪花文壇は実質なき文壇なりき。浮華なる文壇なりき、不孤が目撃したる浪花多くの文士は本領なき文士なりき、放蕩なる文士なりき。有為の士は藩閥の掣肘せられて鵬翼を伸ばすを得ず、青年文士は俳壇の孤壘を株守して他を顧みず、…」などと記し、俳句青年たちに対する批判と浪花文壇に対する愛憎を表す檄文を載せた。

\* 20 『文芸界』の編集者時代に不孤は、高須梅溪や西村酔夢(真次)、中村春雨、佐野天声(角田浩々歌客の弟)ら早稲田グループと近松研究会を開いていた(『新小説』明治三十八年七月号の高須梅溪の不孤追悼文による)。また、『文芸界』明治三十五年一〇月号・十一月号で田岡嶺雲との間で「写真主義」の評価をめぐって論争をし、『文芸界』三十五年二号の金港堂お伽噺広告に、「マツチ売の小娘」「不思議の石」の翻訳者として名を連ねている。

\* 21 薄田泣菫「まどひを解くの辞」(『小天地』第一卷九号、金尾文淵堂、明治三十四)

\* 22 児玉花外「神楽岡の麓」『新小説』明治三十八年七月号、春陽堂

\* 23 薄田泣菫「恋妻であり敵であった」『太陽は草の香がする』所収

\* 24 網島梁川「平尾不孤君を弔す」『新小説』明治三十八年八月号、春陽堂

\* 25 野口存弥前掲書 \* 18

\* 26 『新時代』三卷五号、明治四〇年一月

\* 27 『社会主義詩集』(岡野他家夫編 日本評論社 昭和二四年)。児玉花外の原著は発禁になりすべて回収され版も没収されたため、市場に一冊もなく、金尾文淵堂にも著者の手元も無いという幻の本だったが、岡野が収録された詩をそれ以前に発表された雑誌等から集めて昭和二四年に復元し、「同情録」を収めて刊行した。

\* 28 野口存弥前掲論文 \* 18

\* 29 佐藤一樹「余白欄のアジア主義―大正期『太陽』の詩文欄と児玉花外」は、博文館の雑誌『太陽』に児玉花外が辛亥革命期の革命英雄たちへの熱い思いを語った詩を幾篇も綴った事実を紹介し、花外がアジアの革命家たちについて非常に詳しく、『太陽』編集部求めに応じて埋め草的な時代遅れの感がある詩を昭和の初めまで

掲載していた理由を考察している。『雑誌『太陽』と国民文化の形成』に所収、思文閣出版、二〇〇一年。

\* 30 谷林博『児玉花外その詩と人生』白藤書店、一九七六年

\* 31 綱島梁川の薄田泣菫、望月世教宛て書簡は、綱島政治編の梁川遺稿『書簡集』（明治四十一年、獅子吼書房）所収。綱島政治は梁川の弟。また出版社の獅子吼書房の主宰者は薄田泣菫の弟鶴二で、元文淵堂の編集者だった。文淵堂が四一年に倒産して獅子吼書房を設立、梁川の遺稿集や薄田泣菫の詩集などを刊行したが間もなく廃業した。

\* 32 『新小説』明治三十八年八月号、春陽堂。「君と予と国籍を同じうし、学舎を同じうし、不幸にして病症をも同じうせり。世縁浅からずといふべし、しかも人生遭逢の意の如くならざる、予の君と相見たる、前後を通じて唯二回に過ぎず……」と梁川は記す。

\* 33 児玉花外『東京印象記』金尾文淵堂 一九一一年

\* 34 薄田泣菫『落葉』獅子吼書房 一九〇八年所収

\* 35 赤松麟作『自伝絵巻やつとこ どのこい』昭和二十四年、『赤松麟作画集』（一九七八年）に収録。

\* 36 『ふた葉』第一巻六号、明治三十二年六月

\* 37 青木月斗『鬼史と北渚と余』『同人』大正九年

\* 38 文淵堂の二階には図書室もあった。『ふた葉』第二巻一号（明治三十二年七月）の文淵会記事に図書室開設の案内が出ている。会員の縦覧に供すとして「収むるところの図書多からずと雖も、元禄文豪西鶴の遺著永代蔵俗つれづれ、本朝桜陰比事をはじめとして、珍書古典またすくなからず、新刊の雑誌に至りては、各地に於て発行せるもの毎月三十余种……」と記す。金尾文淵堂が江戸以来の書店で、おそらく西鶴の和本その他が在庫としてあったと思われる。また、新刊の書店も営んでいたので、商品としての雑誌類の一部を図書室に提供したのではないか。

\* 39 青木月斗『夢の如し』『子規全集』別巻二回想の子規一、講談社、一九七五年収載

\* 40 青木月斗『俳諧雑誌』第一巻九号、大正六年九月

\* 41 正岡子規『仰臥漫録』明治三四年一〇月二三日、『子規全集』五三巻

\*42 この時期に以下の四点が刊行された。

「俳句問答上之巻」(俳諧叢書第十一編) 瀬祭書屋主人著 M34・12・15 俳書堂・金尾文淵堂

「俳句問答下之巻」(俳諧叢書第十二編) 瀬祭書屋主人著 M35・2・21 俳書堂・金尾文淵堂

「瀬祭書屋俳句帖抄上巻」 瀬祭書屋主人著 M35・4・15 俳書堂・金尾文淵堂

「春夏秋冬夏之部」(俳諧叢書第八編) 子規・碧梧桐・虚子共編 M35・5・15 俳書堂・金尾文淵堂

\*43 斎藤昌三前掲\*1

\*44 『ふた葉』一卷五号、明治三二年五月の文淵会例会記事

\*45 藤田福夫前掲\*5

\*46 前掲\*19参照

\*47 河井醉茗『醉茗隨筆』起山房、昭和一八年

\*48 小林政治前掲\*11。小林政治(天眠)は『文庫』などに投稿する貧しい文学少年であった。浪花青年文学会の設立に加わり、同人の中村春雨や高須梅溪らが上京した後も関西にとどまって毛織物(毛布)会社で成功する。早くから与謝野鉄幹夫妻と親しく、与謝野の長男に小林の長女が嫁いでいる。

\*49 明石利代前掲\*9

\*50 小林天眠「鉄幹と金尾文淵堂」『雲珠』昭和三〇年一〇月

\*51 宮武外骨・西田長寿『明治新聞雜誌関係者略伝』みすず書房、一九八五年ほか

\*52 松崎天民『同棲十三年』磯部甲陽堂、一九一四年。これは妻が伝染病に罹り三三歳で亡くなる悲しみの日々をつづったもの。

\*53 松崎天民は『小天地』の一卷一号から、「文苑」欄に登場し、一卷七号(三四年五月)から「社会」欄を中心に「人力車夫」「大阪精神病院」「木賃宿」「京都盲啞院を訪ふ」などのルポを連続執筆、他に「芸苑」欄にも書くなどほぼ毎回寄稿している。

\*54 薄田泣菫『泣菫隨筆』一九二六年所収

\*55 高木健夫『新聞小説史 明治篇』国書刊行会、一九七四年

- \* 56 広津和郎『年月のあしおと』講談社、一九六三年  
\* 57 高木健夫前掲\* 42

参考文献

- 伊達俊光『大大阪と文化』金尾文淵堂、昭和一七年  
小川菊松『出版興亡五十年』誠文堂新光社、一九五三年  
小森陽一・紅野謙介・高橋修編『メディア・表象・イデオロギー』小沢書店、一九九七年  
寿岳文章「ある出版者の思い出」『出版ニュース』一月上旬号、一九七五年  
『近代文学研究叢書』9・22・36・39・42・51・53・65巻、昭和女子大学近代文化研究所  
河井醉茗『南窓』人文書院、一九三五年  
薄田泣菫『泣菫随筆』富山房、一九九三年  
薄田泣菫『完本 茶話』上・中・下 富山房、一九八三年  
菊池幽芳『幽芳全集』第一三巻「私の自叙伝」日本図書センター復刻、一九九七年  
高安月郊『高安の里』書物展望社、一九三四年  
斎藤弔花『国木田独歩と其周囲』小学館、一九四三年  
綱島梁川『書簡集』獅子吼書房、一九〇八年  
畑実『自然主義文学断章』公論社、一九七九年  
角田浩々歌客『漫遊人国記』東亜堂書店、一九一三年  
平尾不孤「写実主義の根本的誤謬想とは何ぞや」ほか、田岡嶺雲との論争『文芸界』（金港堂）一九〇二年、『近代文学批評大系』二所収、角川書店、一九七二年  
後藤宙外『明治文壇回顧録』河出書房、一九五四年  
鈴木貞美編『雑誌『太陽』と国民文化の形成』思文閣出版、二〇〇一年